幻想郷　幼女と少女　~forth hearts' had Rydia plus you~

夜光　沙羽　@大体秋に花火って……季節外れ極まりない

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最終幻想郷　幼女と少女　~ｆｏｒｔｈ　ｈｅａｒｔｓ'　ｈａｄ　Ｒｙｄｉａ　ｐｌｕｓ　ｙｏｕ~

【Ｎコード】
Ｎ５２７８Ｖ

【作者名】
夜光　沙羽　@大体秋に花火って……季節外れ極まりない

【あらすじ】
『ずっといっしょにいる。約束だ』そういったはずの彼から私の体が離れていく。なぜ？　という疑問とともに意識を失った。
次に目が覚めたときに、側にいたのは、彼ではなかった。☆　★　☆　★　☆　★　☆　★　☆　★　みんな多分この発想はあった。
それをやるから面白いんだよね。　幼き召喚士、リディアはどこをどうスキマを経由したのか（犯人モロバレ）幻界ならぬ幻想郷へ辿り着く。そこで彼女が会得するものとは？

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（前書き）

タイトルでつられた？　このロリコンめ！！　ベアード様が許さないぞ！？　たぶん。

どうも、いつもの方はこんにちは。初めましての方は、初めまして。夜光沙羽です。
ええ、毎度毎度すみませんが、原作ブレイクはおそらく必至です。
しかし、今回のブレイクは、そこまでブレイクするほどではないかもしれませんね。（知るか）

この小説は、『東方ｐｒｏｊｅｃｔ』×『ファイナルファンタジー？』の二次小説です。
もし、『ファイナルファンタジーって何？』『東方厨はＦＦから消えろ』
という風に嫌悪感を抱かれる方は迷わずブラウザの「戻る」ボタンをクリックしてください。

それでもいいよ、という方は、しばらくお待ちください。

少女祈祷中・・・

それでは行きましょう！！

Prologue

あの人はいったい何のために私なんかを守ってくれるんだろう？
そう思った私は、彼に聞いた。「償いなんて、もう十分だよ？」
彼は、そうじゃないんだ、と悲しく笑った。だから私は聞いてみる。
「じゃあ、ずっといっしょにいてくれる？」
頷いた彼は、その姿からは想像できないほどの清らかな心の持ち主だったんだ。
そ れ な の に … … 。
「くそおおお！　リヴァイアサンだと！？」
「ええい慌てるな！　全速後退！　あんたがた、揺れるからしっかりつかまってろよ！？」
「わ、わかりました！　みんな、大丈夫か！？」
「あ、ああ……ぼ、ぼくは一応！」
「うむ、私も大丈夫ですぞ！？」
「そうか、じゃあｒ」
彼が聞こうとしたその時だった。

ガクンッ！！

「くそお……リヴァイアサンに完全につかまっちまった！？」

船が大きく揺れた。そしてその勢いで……

「キャアアアアアアアアアアアアアア！！！」

私は、海に放り出された。

「――――――――ッ！！　だ……丈……」

彼の、声が、聞こえて……来ない……。

だんだん閉じていく視界の中で、私が最後に見たのは、大きな口だった。

ごめんね。……さよなら。

☆　★　☆　★　☆　★　☆　★　☆　★

「本当！　本当なんだって！！」

「いやだって信じろったってなかなか難しいよ」

「ミスティア、天才の私がその謎を解明してあげるわ！」

「チルノちゃんキャラ変わってない？」

「ところでミスティア、私は早くうなぎが食べたいのだー」

霧の湖。そこは年中霧が立ち込めていることで有名な湖である。
その畔、俗にいうバカルテット＋1……チルノ、ミスティア、リグル、ルーミア、大妖精がいつものようにたむろっていた。

「だって、飛んでたらいきなり景色が変わって、なんか妖怪の集団に突っ込んじゃうの！　それで終ったら元の所に戻るのよ！！」

ミスティアはいつにもなく熱演していた。それをだから、とリグルがいさめる。

「ないない。だって、そんなことでスキマ妖怪が遊ぶと思う？」

「スキマじゃない。一気に、本当に景色が変わるの！」

「ふふん、リグル、あんたにはまだ分からないの？　この天才のあたいにはもうわかってしまったわ！」

チルノがすっくと立ち上がった。

「それは、召喚されてるのよ！」

「召喚？」

「召喚って……あぁ、チルノちゃんがやってたあのゲーム？」

大妖精が聞いた質問にチルノはそう！　と頷いて続けた。

「なんかガメボヤドバンチェとかいう持てる機械のフィナルファン（GAMEBOY ADVANCE FINAL FAN）タシュとかいうゲームでね！　あたいよりはきれいじゃないけど女（TASY）の子が動物を呼んで敵に当てるの！　それを召喚って呼んでたんだ」

「でもゲームでしょ？」

大妖精の言葉を聞いているのは誰もいなかった。

「うーん……ごめん、よくわかんないや」

リグルはずっと悩んでいたようだったが、はぁとため息をついて、ミスティアが持ってきた八目鰻をぱくついた。

一転ミスティアはこれで謎が解けたとばかり満面の笑みを浮かべた。

「良かった。じゃあもうこれでその召喚した子としゃべれるんだね！」

「ん？　たぶんね」

「そーなのかー」

そうして5人は再びエクストリーム缶けりで遊び始めたのだった。

……その後、大妖精の姿を見た者はいたとかいなかったとか。

☆★☆★☆★☆★☆★

小さいころからそうだった。

いつもいつも、私は呼び出す召喚獣が違ってた。

チョコボをみんなは呼べるのに、私は羽根を付けた人間しか呼び出せなかったんだ。

なんで？　何度もそうお母さんに聞いたけど、そのうち、私はその事を聞かなくなった。

そのたびに、お母さんが困った顔をするのを、私はちゃんと知ってたから。

私は、この村の子じゃなかったのかな？

そう思ってた日、村は焼け落ちた。

目の前で火から守ってくれたお母さんは、焼かれて死んじゃった。

目の前にいたお兄ちゃんたちが、殺したんだ。

「もうみんな、大っ嫌い！！！！」

そう叫んで、召喚したのは、やっぱり違ってた。

タイタンじゃなかった。

ちっこい角付けた女の子だった……。

それでも、私を必要としてくれた。

お兄ちゃん、会いたいよ……。

――――――セシルお兄ちゃん――――――

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

感想、批判、矛盾点などなどありましたらお願いします。

作者はつい昨日平均Ｌｖ５５（目標Ｌｖ６５）でゼロムスを倒せましたｗ　　……２回ほど。

１回目は原因不明のブラックアウトで……しくしく。

セシル、カイン、ローザ、パロム、ポロム、乙でした。

で、そのときにこの話を思いついたんですねｗ

Ｌｖ１　絶望したって、起き上がればいいんだよ？

「咲夜、これ、何かしら？」

「何はいけませんよお嬢様。おそらく何かがあったのでしょう。かなり衰弱していますからベットに運んできたのです」

「あら、その小さな体でよくここまで……ってそういう問題じゃない。なぜ！！　私のベットを占領しているのよ！！」

「あれ、もちろんお嬢様用にベットを新調しましたよ？」

「それを先に言いなさい。びっくりしたわ、お客様用の部屋に私のベットを見つけたから」

「もうだいぶ古くなってしまいましたから」

「たかが５年でそこまで古くなるかしら？」

そう押し問答（？）しているのはレミリア・スカーレットと十六夜咲夜。この紅魔館の主と完全で瀟洒なメイド（見習い）である。

そして、その前で元レミリアのベットで眠っているのは碧髪の幼女。

「……それにしても咲夜、この子どうしたの？」

「庭にずぶぬれで倒れてるのを美鈴が見つけまして、急いで連れてきたんです」

「……ずぶぬれ？　今日は……」

「快晴です。なので、何かおかしいと思うのです」

「……スキマ妖怪かもね。それだったら今頃二重の意味でくしゃみをしているかもしれないわね」

「ハックショイ！」

「まったく、紫様はもうちょっと神隠しの危険さを分かってからやってくださいよー」

「わ、わかってるわよ、でもまさかいいなと思った子が海の中だなんて思わな……クシャン！！」

その日、八雲家一帯は大いに濡れていた。
翌日には藍の手によって八雲家の改装工事がおこなわれる羽目となったのだがそれはまた別の話。

「……あ……う……」

「あ、咲夜！」

「分かってますお嬢様。……目が覚めましたか？」

彼女が真っ先に目にしたのは、銀色の髪だった。だから、

「セシル！！」

そう叫んで彼女は咲夜に抱きついた。

「は？　え？」

咲夜はいきなり抱きつかれたことに驚き、目を白黒させた。

「良かった、セシルも助かってたんだ！」

明らかにその『セシル』と体のサイズが違うだろうに、彼女は咲夜に抱きついたままだった。

「……セシル？　……小娘、そのアンタがつかまってるその娘は咲夜よ」

ぴくっと彼女の耳が動き、その言葉を理解するまでに、ゆうに5秒以上はかかった。そしてヘニャ、と抱きついていた腕をほどいた。

「セシルじゃ……ない？」

「……え、ええ。わたしは十六夜咲夜です。あなたのお名前は？」

「……わたしは、私は、リディア。」

リディアはそう言うと茫然とした様子から急変し、咲夜に聞いた。

「ね、ねえ！　ここは！　ここはどこなの！？」

「ここですか？　ここは紅魔館です」

「その、コーマカンってのは、どこにあるの？！」

「幻想郷です」

「ゲンソーキョー……って、どこの大陸？」

「……」

咲夜とレミリアは一瞬にして理解した。ああ、やっぱりこの子は、外来人なのだ、と。

「幻想郷は、海がありません。よって、大陸という言葉は使われていません」

「海が……ない？」

「ええ」

いやな予感がした。こういうときの変な予感は、確実に当たるのだ。

「ね、ねえ。ここに……ピンク色の鳥の人って……いる？」

「ピンク色の鳥の人？　……ミスティアの事かしら？」

「ああ、あのたまに鰻を売りに来る子のことですね。いますよ？」

リディアは愕然とした。
以前、長老や母から聞いていた、幻獣が住まいし世界、『幻界』。
そのピンク色の鳥の人がいるならば……もう間違いはない。
ここは……幻想郷という名の、幻界なのだ。
それを理解した時、リディアは絶望に覆われた。

「あ、ちょ、ちょっと、リディア！？」

「リディアさん！？　しっかりしてください！！」

夢の中へ落ちていくリディア。
夢の中は、幸せだった。
いつでも、愛しきセシルが、いてくれるのだから。

でも、夢を見ていくうちに気づいた。
セシルが、変わっていく。
黒から、白へ。
そんな風に、変わっていく。

なら、私も変わらなくちゃいけない。
ローザお姉ちゃんが、私に勇気を出せ、といった。
そしたら、ファイアを覚えられた。
なら、今度もできるはず。
勇気づけてあげたことだって、あるんだから。
頼りないギルバートお兄ちゃんを叱りつけたことだって、あるんだから。

あまりにもの絶望の中、異世界で育ちし人間は、その苛酷な環境の中生きてきた精神を基に、普通では考えられない強さを見せた。
普通の人間であれば、一生そのまま堕落し、過ごしていくだろう。
しかし、彼女は違っていた。
彼女は思っていた。
起きたときに、こういうんだ。

「元の世界に帰るやり方を、一緒に探して！」

Ｌｖ１　絶望したって、起き上がればいいんだよ？（後書き）

と、言うわけでリディアがまた一つ大人になりました。
暗黒騎士の優しさで怖々心を開き、
ヘタレギルバートのために叱りつけ、
ローザの一言で勇気を出して炎を覚え、
クリスタルを奪われたみんなのために勇気づけて、
そう、リディアは普通の大人顔負けの強い精神を持った女の子なのです。

結構無理付けな気はしますが。

Ｌｖ２　怖い人だと思っても、じっくり見ればいい人なんだよ？（前書き）

ちび咲夜さんとリディアがかわいすぎて死ねる。

Ｌｖ２　怖い人だと思っても、じっくり見ればいい人なんだよ？

「……起きられましたか？」

「……セシ……ううん、サクヤ？」

リディアはそう自分に決心を付けた後、自らの意思で意識を浮上させた。

そこにはすでに、レミリアの姿はなかった。

「そう、私は十六夜咲夜です。……あなたのお名前をお聞きしてもいいですか？」

「私は、リディアです。さっきも言ったような気がするけど」

「先程はだいぶ混乱しておられましたので。一応もう一度お聞きしたのです」

あくまで敬語を使い続ける咲夜に、リディアは耐えきれなくなって言った。

「あの？　サクヤ？」

「何でしょう？」

「私、まだ7歳で。だから、敬語は使わないで……」

「7歳！？　嘘、私と同い年なの！？」

咲夜はこの子を１０歳ぐらいかと勘違いして、敬語を使っていたのである。
一方リディアは、今まで使われた言葉ではないゆえ、何分首の後ろがこそばゆいような感覚に陥っていたのだ。
しかも、同じくらいの年の子から、である。変な感じにならない方がおかしいものである。
それを感じた咲夜はふっと口元を緩ませ、言った。

「分かったわ。こんな感じでどう？　ところで、リディアって名字は何なの？」

「……名字……え……っと……」

そう、ないのだ。リディアには名字が。
セシル・ハーヴィ、カイン・ハイウィンドなど彼らには名字があるというのに。

正確に言えばリディアにも一応名字は存在する。
リディア・ミストという。

ただし、それはミストの村の名字をバロン国王……水のカイナッツォが剥奪したために疑似的に使っていた名字である。
もちろんリディアはそんな事は知らないから、名字はないもの、と教えられてきたのだが。

「名字……わからない……」

「そう、困ったわね……。これじゃいくら文献を探したって出てくるわけがないわ……」

咲夜の困った口ぶりから、リディアは今自分がいけないことをしてしまったのか、と誤解した。

「あの……迷惑なら……出ていく」

「駄目」

咲夜はまっすぐな目でリディアを見据えた。

「それこそ迷惑になる。それであなたが妖怪とかに襲われたら私たちが悲しむのよ？」

「妖怪？」

「うん、モンスター。あなたじゃ多分、一人で生き残るのは無理」

そして、咲夜はこう続けた。

「ねえリディア。リディアさえよければ、ここの子にならない？今からすぐあなたの世界に帰るのは難しいかもしれないの」

「私の、世界？」

「そう、リディアが言うセシルたちがいる世界。すぐには絶対に帰れない。だったら、私と一緒に、ここで働かない？」

咲夜の言葉はリディアにとってこの上なく嬉しい言葉だった。

そして、心に決めていた、あのセリフを言う時がきた。

「うん！　ありがとう！　そして私と一緒に、元の世界に戻る方法

を探して！」

「もちろん！　頑張ろうね、リディア！」

咲夜とリディアが、親友となった瞬間だった。

しかしながら、同じくレミリアに拾われた存在である咲夜の一存でリディアがここに住む、という事が確定されるわけがない。

咲夜はリディアの手を引き、レミリアの部屋に向かう。

「お嬢様、入ってもよろしいですか？」

「入りなさい」

扉の裏からレミリアの声が聞こえ、咲夜がドアノブを開けた先は、まるで。

「わぁ……パーティーのホールみたい……」

「あら？　その小娘目が覚めたのね？」

レミリアはその声を上げたリディアに気づき、文々。新聞から顔を上げた。

「お嬢様、このリディアをここに住まわせていただけないでしょうか？」

咲夜はそんなレミリアに直立不動でそう懇願した。

「いいわよ。条件があるけど」

「……何でしょう？」

「わ、私、何でもやります！」

リディアは自分の話題だという事を忘れてレミリアの部屋に見とれていたのだが、空気を読んだのだろうか、咲夜の横で直立不動で叫んだ。

「リディア、お前にメイド長を命じる」

「「……え！？」」

咲夜とリディアは二人とも驚いた。

リディアはいきなり自分がそんなところに行っていいのか、と。もちろん咲夜は――――――

「お嬢様！　私は――――――」

「何言ってるのよ。咲夜もメイド長よ。アナタたちかなりもう仲が良いみたいだから」

優劣をつけたらおかしいでしょ、とぼそっとレミリアは言った。

「あ、だけどこれから2週間は咲夜と一緒に働いていろいろ覚えること。あと咲夜もわからないことは美鈴が教えてくれるはずだから」

「ねぇ、メイリンって？」

「あとで教える。それより、お礼お礼！」

咲夜もよっぽど嬉しかったのか満面の笑みだった。

「あ……ありがとうございます！！」

「まだあるわよ、リディア」

レミリアはリディアの感謝の言葉を遮るかの如く、さらに条件を突き付けた。

「あなたが持つ能力はどうやら運命を覗くと、『黒き魔法並びに召喚した者を使役する程度の能力』の様ね。その力、常に私の得になるように使用すること。私利私益は認めるけど、私に害になったり、私の害となる者の得になったら即殺すわよ」

「分かりました！　私、絶対に、えと、お嬢様の為にこの力を使います！」

命を救ってもらい、さらに生活することすら許可してくれた者に恩を返すことの、何がいけないのであろうか。

リディアは、レミリアに感謝していた。

「あーあー、わーった、わーったから。明日から咲夜に色々と教えてもらえ」

そう言ってレミリアは新聞に目を落とし、シッシッと手を振った。

「失礼します、お嬢様」

「し、失礼します！」

扉を閉じてから、咲夜とリディアは顔を見合わせ、

「やったぁ！！」

と抱きあってジャンプして喜んだ。

何度かぴょんぴょんとジャンプした後、咲夜はリディアに言った。

「あのね、お嬢様リディアにお礼言われて照れてる」

「え、そうなの？」

「咲夜！　あんまふざけたこと言ってると殺すわよ！！」

「はーい！！」

レミリアの怒号が飛んでくるが、二人ともどう聞いても照れ隠しだとしか思っていなかった。

「あー、そうだ！　リディア！　忘れてた、ちょっときなさい」

「？　はい！」

リディアが部屋に入ると（ちなみに扉を閉める前に咲夜に「『失礼します、お嬢様』って言うの！」と怒られた）レミリアは新聞に目

を落とし、チョイチョイとこっちに来いのジェスチャーをしていた。

「なんでしょうか、お嬢様」

リディアは（お嬢様って何歳なんだろう）と思いつつ近寄って行った。

「あんた、名字がないんだって？」

「はい。……あれ、何で知ってるんですか？」

「ふぇ！？　そ、その！　別に盗み聞きしてたんじゃなくて運命を見ただけ！　そう！　……こほん。で、名字を上げようかと思うんだけど」

「え、いいんですか！？」

何だったんだろう、などといった感情はそれ以上に嬉しいことによってどっかに行ってしまった。

「ええ。実際十六夜咲夜という名も私が与えたものだしね。……で、あなたにはすでにリディアという名があるから和風な感じの名字はだめね。今日は上弦の月だし、「クァータームーン」……これをこうしたら……いいわね。あなたの名は、リディア・クアートムーン。どうかしら？」

「クアートムーン……リディア、リディア・クアートムーン！　ありがとうございます！！」

何度も自分の名を呼んで喜びをかみしめるリディアに、レミリアは

顔を赤くして新聞に三度目を落とし、怒鳴った。

「あー、いいから。用は以上。とっとと帰れ！　あーそうそう、私は４９２歳よ」

「はい！　ありがとうございました！」

やっぱり幻獣って長生きするんだ、あれ？　でも私その事言ったっけ？　と思いながら部屋を出ると（今度は「失礼しました、お嬢様」は忘れなかった）、咲夜が待っていた。

「良かったね、リディア！」

「うん！」

そういいながら、二人は咲夜の部屋へと帰って行った。

その後、レミリアは美鈴を呼びつけ、お客様室のベッドを咲夜の部屋に移すように、と命令した。その結果リディアと咲夜からさらに感謝されて照れたレミリアは美鈴に「うーーーーーー！！」と言いながらぽかぽか殴りかかって行ったという。

「うーーーーー！！　はぁはぁ……。ふぅ。さて、リディア、何かあったら、私を召喚しなさい、いいわね……？」

実はその日の夕食時、レミリアの血が一部使われていたため、リディアの体内にはレミリアの血が取り込まれたのだった。

?召喚獣　「ドラゴン」　を　覚えた！

Ｌｖ２　怖い人だと思っても、じっくり見ればいい人なんだよ？（後書き）

ちび咲夜さんとリディアがかわいすぎて死ねる。

と、言うわけで吸血鬼という種族上霧になる能力も持ち合わせているレミィさんがミストドラゴンの位置に着きました。
最初はやっぱミストドラゴンから取得したかったんですよね。
ただのドラゴンだったら中国で一発なんだけど。
実は十六夜の前→満月　とか　後→居待月とかやりたかったんだけど
満月は「フルムーン」で何かあれだし、
居待月は翻訳不能だし。
てな訳でクアートムーンになりました。
次回、パッチェさんと出会う。

あ、そうだ、レミリアの台詞でわかると思いますが、時期としては紅魔郷の８年前です。
だから紅魔郷時咲夜とリディアは１５歳になってます。
一応補足でした。

Ｌｖ３　喧嘩を売られても、勝てばいいんだよ？

ジリリリリリリリ……
別に外から「ちんちん～」とか「あやややや」とかいう鳴き声が聞こえれば朝、という訳でもないので、彼女たちは目覚まし時計で覚醒する。

「……おはよう」

「……おはよう」

大変不機嫌である。
何がも何も、朝である。
朝は彼女たちにとって滅ぶべき存在であった。
げに恐ろしきは……低血圧。

しかし、メイド長たる者まさか二度寝をするわけにもいかない。
しかし、冒険では４時起き等当然であり、徹夜も何回かあった。

「あらおはよう……ファーア」

ブスーッとしたまま洗面所に向かう咲夜とリディアの前に歩いてきたのは今から眠ろうかと思っていたレミリア・スカーレット。

「「……おはようございます」」

「あら、リディアも低血圧なのね。美鈴以外みんな低血圧じゃないここ」

はぁ、とため息をつくレミリア。そう言いながらも自分も眠いのでまぁいいか、と割り切った。

「……お嬢様、今日は何時間でしょう？」

「６時間ね。１０時になったら起こして頂戴」

「……わかりました」

レミリアがゆっくりと去ってから、咲夜は眠い目を擦りながらリディアに教えた。

「朝はああいう風に、今日は何時間寝るかを聞いてね。で、その時間に起こしに行くの」

「……ん」

果たして何割が頭の中に入ったであろうか。

リディアは大きな口をあけて一回あくびをした後、洗面台に向かった。

「あー！　生きるね！　咲……夜……いないし」

洗面台で水がリディアを覚醒させたが、いると思っていた咲夜はいない。

あれ？　と言いながら元へ戻るリディア。

咲夜は倒れて眠っていた。

「……咲夜？　朝。」

「ＺＺＺ……」

反応ナシ。

「咲夜！　起きろー！」

「ＺＺＺ……」

反応ナシ。

「おのれ……。いいもん！　ブリザド！」

リディアは唱えてから、「あ、だめなんじゃない？」と思った。
今日は上限の月の次の日。まだまだ黒魔法が効きにくい状況下ではあるが、常人には十分すぎる威力である。

「えーと、ケアルの準備も……」

いらなかった。

コココン！　コン！　カンカン！

「……あれ？」

氷が数個降ってきただけだった。
咲夜としては十分な個数と冷気ではあったが。

「ひゃうっ！　な、何！？　何！？」

すっかり覚醒した咲夜はこちらに手を向けたリディアを見て、言った。

「あ、黒き魔法、か。ごめんね、ありがと……あれ？　リディア、どうしたの？」

リディアは何か不満げであり、不安げな表情を浮かべていた。

「……私ね、自慢したいわけじゃないけど、黒魔法こんな威力じゃなかったはずなの」

「調整したんじゃない？」

何も知らない咲夜はそう聞いたが、リディアは首を横に振った。

「調整できるものじゃないの、黒魔法って。何でかは分からないけど、ＭＰを同じだけ使って同じだけの威力しか出ない」

「ＭＰ……って魔力？」

「たぶん、こっちじゃそう言うのかも。何でかな……弱すぎる」

うーん、と二人して首をかしげた後、咲夜が閃いたとばかりに手を打った。

「え？　どうしたの？」

「パチュリー様のところ行こう！」

「パチュリー……様？」

また聞いたことのない名前が出てきたよぅ。リディアが軽く混乱しているのに気づいていない咲夜は説明を始めた。

「パチュリー様はお嬢様のお友達で、魔法使いなの。だからリディアにぴったりじゃない？」

「ふぇ？　魔法使い！？　こっちにもいたんだね！　白？　黒？」

「え？　えと……わかんない」

魔法使いと言う言葉を聞いて目をきらきらさせているリディアの質問に、咲夜はちょっともじもじしながら答えた。

リディアはそんなことはまったく気にせずに、

「やった、やった、これでたぶん何とかなる何とか！」

とぴょんぴょんジャンプしていた。

「っと！　そうだ！　すぐ着替えなくちゃ！」

「あ！　忘れてたね！」

彼女たちはそのまま特急で自室に戻っていった。

「へぇ……新入りかい。くく……くくくくかかかかかか！！！」

「リディアって料理はどうなの？」

「あ、結構得意」

ニカッとリディアが笑ったのを見て、咲夜も思わずほほう？　と笑

った。

「じゃあ何が作れる？」

「何を作ってほしい？」

ほう……。咲夜は感嘆した。くく、料理で私に楯突くやつがいたか！！

にやりと不敵に笑っているリディア。面白くてたまらないとばかりにニヤニヤしている咲夜。

完全に咲夜の性格が変わっている。

まぁ7歳同士なのでただ可愛いだけではあったのだが。

「じゃあ満漢全席で」

「作れるか！」

時間と食材足りるの？　そう聞くリディアに、咲夜は冷静だな、と結論を下した。

ここで作れるとかいった暁には時間制限をするところだった。

まぁ妥当なところにしようかな。

「じゃあ……オニオングラタンスープ」

「オニオン……あれか。何人前？」

「とりあえず二人」

「了解！」

「はいはい口調変えても気づいてますからチルノちゃんは帰りましょうね？」

「あ、何をする！　離せええええ！　あたいはあいつにいいいいいい！」

「はいはい。全く、こっちに私たちが来てから半月、ずっとこうなんですから」

「……えと、すみませんでした」

「わかればいいのよ」

テーブルの上にはロイヤルホストのコック長が作ったのかと思わせるような完璧なオニオングラタンスープ。これを15分で作りきったのだ。

「旅してたときは料理係私だったし。そのときそのときで手に入る食材とか違うから自然にこうなったの」

「……旅館とか泊まることなかったの？」

「セシルのためにおいしい料理食べさせたいからコックさんと一緒に練習させてもらった」

「……」

そりゃ泊まる所泊まる所コックから逐一教えてもらえばこの完璧さは当然である。

しかし咲夜にはそれ以上に気がかりなことがあった。

「ねえ、リディア……ってもう食べてるの？」

「あれ、咲夜は食べないの？」

「いや、そういうことじゃなくて……いただきます」

咲夜はぶつぶつと何かをつぶやきながらスープを口にした。

泣けるほどおいしかった。

もちろん、違った意味でも。

「このぉ！　離せ！！」

「グフォ！？　足が……鳩尾に……がくっ」

「……へ、へへーんだ！　ざまーみろ！　さいきょーのあたいに楯突くからだ！　……疲れたし、帰ろう」

「あれ？　あたい何しにいったんだっけ？　忘れちった」

「でも私が得意な料理なら負ける気はないよ！」

「それ私が得意だったら？」

「うぅ……」

今、二人は外で箒を片手にお喋りに夢中になっていた。もちろんお掃除もきっちりやっているが。

ところで、完全に料理に関しては主導権を握られた形となってしまった咲夜はしょぼんとなっていた。

「あ」

「え？」

「あれ」

「……何あれ」

外を掃除し終わったところで、リディアと咲夜の部屋の窓の下で寝ていた（気絶していた）美鈴に咲夜は容赦なくナイフを突き立てていった。

「……いいの？」

「……いいんじゃない？　お嬢様がやれっていってたし。あ、そうそう、これが美鈴ね」

「めーりん……か」

リディアはぷにっと美鈴の胸のふくらみを突っついた。
ぷにぷに。つんつん。

二人ともちょっと涙目になっていた。
特に咲夜は5本ほどナイフを追加した。

「……いつかはこんな風に」

「だね。絶対なってやろう、リディア」

「うん」

謎の約束をした二人であった。

「あ、そうだ、さっき聞こうとしてたこと」

「ん？」

箒を片付け、今度はモップを取り出した二人は館内の清掃に入った。

「そのセシルって何歳なの？」

「え？　確か２０歳」

「……。セシルへの好きって、どんな好き？」

小さいころから図書館でそういう本を読み、それなりに知識はつけた咲夜。
しかし、紅魔館にはそういう男の子はいないのが現状。
でも、そんな咲夜にだって７歳と２０歳はないと分かっていた。
と、言うわけでどういう好きなのかを聞いてみたのだが。

「え？　……なんだろう？」

とどのつまり、リディアはセシルを男として好きなのか、家族的に好きなのかが分かっていないのである。
７歳だから当然と言えば当然であるとはいえ、だいぶ積極的な面を見せているリディアである。

「……なんかセシルがうらやましいな」

「え、なんで？」

「だって、リディアにこんなに好きって言われてるじゃない。私も

彼氏ほしい！」

その場でじたばたし始めた咲夜を見て、リディアは一言。

「……できるよ、きっと」

謎の勝者の余裕であった。

「パチュリー様、入ってもよろしいですか？」

「あら咲夜、いらっしゃい。そっちの子は？」

「は、はじめまして、リディア・クアートムーンです」

「とりあえず説明しますので」

咲夜が説明している間、リディアは図書館の観察中。
やけにかび臭いし、まるで何かの塔が立っているんじゃないかと思うほどの大きさの本棚。
それが1、2、3、4、5、……たくさん。
前も後ろも本棚本棚本棚本棚。
思わずぽかんと口が開いてしまうのも仕方のないことといえよう。

「……と、言うわけです」

「なるほど、レミィが……。まぁたしかにこれから起こすあれに対しては準備が必要よね」

「あれ、とは？」

「それの説明をする前にまずリディアのその魔法、という物についてね」

リディアはその言葉を聞いて、身を乗り出した。

「教えてください！　私の黒魔法、あんなに弱くなかった！」

うん、とパチュリーは頷き、言った。

「あなたの魔法は月と、そしてその名前によって、ちょっと弱体化しているわね」

「ジャク……タイカ？」

「あぁ、ごめんなさい、弱くなっているの。あなたのその名前、クアートムーン、とは上弦の月という意味なの。上弦の月はつまり」

「黒魔法……弱くなってるんだ」

「そう。それが半永久的に続くかもしれないわね。きっとレミィも適当に付けたんでしょうけど……」

リディアは椅子に座りなおし、そして、言った。

「何で……なんですか？」

「よーし！　見つけた！　ゲンソーキョーにこんな家はいらない！
と、言うわけで下っ端からさいきょーのあたいが粒していくのだ！」

アクセントを間違えたことも気づいていないが、チルノはそのやや間違った正義を遂行しようとしていた。

Ｌｖ３　喧嘩を売られても、勝てばいいんだよ？（後書き）

ご意見、ご感想、この二人を描いてくれるという方は是非。
次回は？が。何をしでかすんでしょう。

戯行典と違ってこっちは戦闘系にはならないと思いますがね（ボソッ

Ｌｖ４　悲しい笑みを浮かべたって、原因を取ればいいんだよ？（前書き）

今回少しシリアス入りまーす。

Ｌｖ４　悲しい笑みを浮かべたって、原因を取ればいいんだよ？

「ねえ美鈴？　めーりーん……え、ちょ、」

レミリアが何かしらの用事で美鈴を呼びつけてみれば、彼女は咲夜とリディアという新人の部屋の前で倒れていた。
ご丁寧に、尻にはナイフが何本か刺さっている。
レミリアは恐怖した。

「さ、咲夜ー！　リディアー！　助けてええええええ！！」

半狂乱になった彼女はワーンと泣きながら自室へと戻っていった。
カリスマなど、なかった。

「……なんかレミィの悲鳴が聞こえた気がしたわね」

「気のせいだと思います。さ、続きを」

「え、あぁ、そうだったわね」

パチュリーは首を振って想像したその情けない姿をどこかへ飛ばした。
いつもそうだ。カリスマ性を「創り上げた」後は何か切れるようにこうなる。

（まだ、この子に見せて、ショックを抱かせてはダメね。……双方

に）

パチュリーは自分の中でそう結論づけたあと、続けた。

「知っているかしら？　実は私たち、此処に来てからまだ日が浅いの」

「え？　そうだったんですか？」

「そう。まだ私たちも此処に来てから一週間。そして、後また一週間経った後、アナタの力を借りることになると思うの」

「……え？　どういう意味ですか？」

咲夜はゴクリと息を飲んだ。リディアはそれには気付かず、答えをせがんだ。

「……この、幻想郷を、乗っ取ろう、という計画なの」

「〜〜〜〜ッッッ！！？？」

リディアはその言葉を聞いて、硬直した。そして、思い出す。

「ミ……スト……セシル……」

そう、彼女の村は？　ミストの村は？

ある意味では乗っ取られているのだ。永遠の炎に。

村もそうだが、彼女の、心も。

「あ、ああ、ごめんなさい？　何が……」

「いやです」

リディアはその緑の眼を煌かせ、こうはっきりと告げた。

「絶対にその作戦にはのらないです。お嬢様にも伝えてください。私は――――――」

「パチュリー？」

そのリディアの力説の途中、まだ彼女が聞いたことのない声が聞こえた。……まだ自分と変わらなそうな声だ。

「あら、妹様。どうされましたか？」

「ん？　なんかワイワイやってるのが聞こえ……誰？」

金髪に、七色の宝石をつけている羽（？）。リディアはその可愛らしさに思わず見とれてしまっていた。

「……反応ないわね。咲夜、この子は？」

「は、はい、この子はリディアといいます。昨日外でびしょ濡れになっ――――」

「あー！　あの子か！！　ねぇ、リディアとか言ったっけ？　私のこと知ってる？」

咲夜の説明を最後まで聞かずに、彼女は叫んだ。

「……羽……いいな……はっ！　え、えと、何？　痛いひはいはふやへへ」

何でつねるの？　リディアは恨めがましい目で咲夜を見た。咲夜はため息をついていった。

「リディア、このかたはお嬢様の妹様、フランドール・スカーレット様よ」

「ふあんほーうはは？　あう、ははははいはいっへ」

これ以上は咲夜もリディアが何を言っているかわからなくなりそうだったので、手を放した。

「だから敬語必須なの。と言うか私と、此処にいる小悪魔以外には敬語を使うの」

「ひゃい。まだひりひりする」

「……で？　話はいいかしら？」

フランドールは待ちきれなくなったのかタンタンと足でリズムを刻んでいた。

「とは言ったものの……まぁ知ってるはずないわよね」

「なんなんですか？」

リディアの問いかけに、フランはニッコリと笑って、こう言った。

「アナタ、私に殺される運命なの？」

フランドールは狂気の笑みを浮かべ、驚異的なスピードで襲いかかってきた。

「ッ！　ホール……！！」

ド、その言葉が間に合わなかった。麻痺さえさせられれば、と思って唱えたそれは、フランドールにとっては遺言にすらならなかったのだ。

「リ、リディ……！！」咲夜は思わず目をつぶってしまっていた。

誰もがもう間に合わない、そう思っていた時だった。

「たのもー！」

バンッ！　という音と共に開け放たれた図書館の扉。その音にフランドールは一瞬体を膠着させる。
そして、その一瞬の時に、彼女は最後の文字を唱えた。

「ド！！！」

ホールド、麻痺呪文。
狙い過たず彼女の首に微弱電流の綱が巻かれる。

「ッ！？」

フランドールは体を痙攣させ、崩れ落ちた。

「ハァハァ、ご、ごめんなさい、フランドール様……！！」

まだこわごわと覗き込むリディアに対し、フランドールは悲しげな笑みを浮かべた。

「こっち、こそ。私、ね？たまに、こうなっちゃうんだ……」

「……」

その笑みを見たリディアは悲しくなった。……今まで、どれだけこの笑みを浮かべてきたひとがいたんだっけ？

セシル、ローザ、ギルバート。彼らは皆そういう笑みを浮かべていなかったか？

「その……そうなっちゃう原因は一体、何なんですか？」

「そこでさっきの話が出てくるわけよ」

パチュリーは前に出てきた。

「ここには、色々と忘れ去られたものが流れ着くことがあるの。それを素直には差し出してくれないでしょうから、」

「……なるほど、じゃあ協力します」

そのリディアの返答を聞いたパチュリーは肩を落とした。

「やっぱりね。だからって賛成なんかして……今、何て言った？」

「え、協力しますって……」

そっか。パチュリーは気づく。この子、まだ子供なんだっけ。見た目は子供、頭脳は大人、という絵と文字が両立している本も見たことがあるパチュリーはそれが常識なのだと思い込んでいたが。実際に証明例が此処に約二人もいるのだし。

まぁ結果としてはいいでしょ、そうパチュリーがため息をつくと同時に、彼女は怒鳴った。

「あんたたち！　このサイキョーのあたいを蒸しして楽しく雑談とは仲がいいじゃない！！」

なにか違う気がする、とようやく彼女に気づいたリディアは思ったが、とりあえず「蒸しして」置くことにした。

ずんずんと入ってくる彼女。それにつれ何やら寒くなってきた。

「……咲夜、気のせいじゃないよね？」

「……ええ。多分あの子から。美鈴から毎日襲撃を受けていると聞いたわ。氷の妖精、チルノ」

「ほっほう！　サイキョーのあたいの名を知っていたか！　そう、あたいは幻想郷サイキョーのチルノ！　幻想郷の平和はあたいが守る！」

「え、もうバレちゃっ……！！　もがもが」

素直なリディアはそう叫んでしまいそうになり、咲夜が必死に口を抑えようとしたが、時既に遅し。

「あら、やっぱり何かするつもりだったのね！　あたいの必殺技で片付けてやる！」

と、チルノはおもむろに手を腰のあたりまで持っていった。

「……かめはめ波でも撃つつもりかしら」

パチュリーはそう呟くが誰も聞いちゃいなかった。

「あたい必殺！　ダイヤモンドブリZ」

「おい氷精、人の家でなかなかいい御身分だな。私は門番がやられて誰もいなくて寂しかったからイラついているんだ」

やばい、引きつった笑いを見せながらチルノが後ろを向くと、殺気立っているレミリアの姿が。

「お、お前がここの主人だな！　幻想郷から出て」

「一回……おやすみなさいッッッ！！！」

「お休みなさいまた明後日ええええええええええええええええ！！！」

レミリアはグーでおもいっきりチルノをぶん殴った。キレイに図書館の天井ガラスを突き抜け、チルノは飛んでいったという。

被害者K「でも天井直すのは私の仕事なんです。辛いですよぅ」

その日、妖精たちは「願い事が叶った」と嬉しそうにしている子がたくさんいたとかいなかったとか。

「そうか、苗字がそれだと……」

「私の黒魔法、強くしてくれませんか？」

レミリアはしくじったな、と頭を抱えていた。
それではこの後起こす聖戦（と、レミリアは呼んでいる）の戦力に足りなくなるんじゃないか？
だけど、下手に攻撃力を上げさせても……。
確かに悩みどころである。
レミリアだってそんなに殺し合いをするのはゴメンなのだ。

「……そうか」

レミリアは立ち上がって、パチュリーを指さし、リディアにこう告

げた。

「パチェに師事してみたらどうかしら？」

Ｌｖ４　悲しい笑みを浮かべたって、原因を取ればいいんだよ？（後書き）

「自分が上げた苗字だもの、そんな簡単に……ち、違う、大事にしろとかそういうことじゃモガモガ（レミリア」

と、言う訳でこぁ以外全員と面会（美鈴は？）が済んだリディアでした。

フランの狂気を治すため、そう聞いてリディアは迷わず参加表明しました。

たしかにいいことだとは思いますが、我々になってくるとやっぱり相手のことも考えなくちゃいけない。

果たして、どっちの考えがいいんでしょうね。私にはちょっとわかりません。

次回、オアチュリーさんと魔法実習。

Ｌｖ５　先生だって、助手をイジっていい……んだよ？（前書き）

そろそろこのタイトル縛りを脱却したい、夜光沙羽です。
今回は魔法実習＆あらたな召喚獣！
……本当は大人化してから得るものなんですけどね（ボソッ

Ｌｖ５　先生だって、助手をイジっていい……んだよ？

いい提案をしたふっはっはっはとレミリアが（まったくこの通りに）高笑いして出ていくと、場は微妙な雰囲気に包まれた。

「……えーと、リディア、もうさっきの幻想郷云々の話はいいわね？」

最初に沈黙を破ったのはパチュリーだった。

「え、あ、は、はい。っじゃあ、魔法のことについて、聞いてもいいですか？」

別に否定する必要もないので、リディアは怖々ながらも頷いた。

「えぇ、じゃあまず、今覚えている魔法をここにすべて出してみて。話はまずそこからよ」

パチュリーはいつどこからどうやって持ってきたのやら、いつのまにか大きなシャーレの様な物を置いていた。そこに魔法を放てという。

リディアは軽く深呼吸して、基本魔法を放った。

「いきます！　ファイア！　ブリザド！　サンダー！」

火が燃え、氷が落ち、静電気が起きた。

「……」

完全にリディアは涙目になっていた。

「……全力、なの？」

「……そうですよ、ぐすん」

いくらなんでも弱体化されすぎじゃない？　とパチュリーは思ったが、そこは特に追求しないことにした。それより、この魔法シャーレの中に入った炎と氷、そして雷（？）である。

「なるほど、そんなに変わりはないのね、こっちの魔法と。咲夜？　リディアってどこから来たかいってる？」

「いえ、特には」

「……でも別に私の魔法と融合できればいいのよね。よっ、と」

膝を抱えて座り込み、地面にのの字を書く――――――、典型的にいじけたリディアの代わりに咲夜に聞いたパチュリーは、ほっ、と言いながら自身も炎を出し、氷を出し、雷を出した。

「うん、融合できた。一応これで普通に実習ができるはずね」

なんだかんだで世話好きなパチュリーはリディアを呼んだ。

そして、今がこの状況である。

「ねぇ、あれからもう三日ほどたったわよね」

「……。なぜ、威力だけ増えないんでしょうか？」

愛も変わらずリディアが出せるのはマッチに点火するほどの炎、食べられるほどの氷、ぱちっとくる程度の静電気（らしき雷）。

スリプルは相手にあくびを出させ終了。
ポイズンは若干吐き気。
トードだけがやけにうまくいくのだが。

「さぁ、私にもわからないわ。でも何とか種類は増えて行ってるのよね。黒き魔法も、微妙に白き魔法も」

「はい……」

今リディアが覚えている呪文はファイア、ブリザド、サンダー、スリプル、ポイズン、デジョン、トード、ストップ、ケアル、サイトロ、ホールド。以上である。

ファイア、ブリザド、サンダーはいいとしても、そのほかはあまり使いそうにない呪文もあったりする。

例として、デジョンがある。この幻想郷のどこにダンジョンがあるというのだろうか。
サイトロだって地図を見てしまえば一発だ。

「いらない魔法を削ればいいのかしら？」

「いらない、魔法ですか？」

「そう、植物が間引きをすれば育つように、魔法もきっとそうなんじゃないかしら？」

そう言ってパチュリーが上げたのは、白魔法すべて。そしてデジョン。（リディアは間引きとは何かがわかっていなかったが）

「ケアルとかホールドとかなくなったら困りませんか？」

ケアル、回復呪文。確かにこれがなくなればだいぶ手がかかる。だが。

「攻撃は最大の防御、ともいうわ。攻撃に回してしまった方が早い気がする」

「そうですか、わかり……でも、どうやって忘れればいいんでしょう？」

「それが問題なのよねー」

忘れる方法が見当たらない。

パチュリーは生粋の魔法少女、つまり魔法使いでなかったときは一度もない。

それゆえに魔力がどんどんと溜まっていき、このような事態はまずなかったのだ。

「うーん、殴……る？」

「全力で嫌です！　拳を見てからこっち見られると本気みたいで怖いんですけど！」

うーん、とパチュリーが考え込むが、リディアをちらちらと見ながら拳を見ているあたり、怪しい。

「パチュリー様、こぁがやります！」

と、そこに登場したのは本の片づけを終えた小悪魔。３日間連続でここに十四時間ほどいるのだから、もちろんリディアとも友達になっていた。

「ふーん、こぁが？」

内心パチュリーはにやりと笑ったのだが、表面上はどーでもいい、という表情を貫いていた。

「あ、出来なさそうって顔してますね！」

「だってできないもの」

「こぁーーーーーーー！！」

「鳴くなうるさい。小動物かあんたは」

「こぁぁぁぁぁぁ！！」

はぁ、とリディアはため息をついた。パチュリーはどうもこの小悪魔をイジるのが好きなようで、時たまこのような情景を見せられる羽目になるのだ。

「こぁ、こぁ、こぁあああああ！！」

「この胸少しはよこしなさいまったく」

「こーーーーーーーあーーーーーーーー！！！！」

「あの、で、その方法って言うのは」

「あら、そうだったわね。こぁ、説明してあげて」

ようやく本題に戻ることができた。小悪魔は涙目になりつつ説明した。

「私って、一応悪魔じゃないですか。「一応、ね」こぁぁ、口はさまないでくださいぃ。……とにかく、契約のときに何かを奪う事が可能なんです。だからリディアさんと契約すればいいんじゃないかと」

「こぁ」パチュリーが言った。「グッドアイデアね、それ」

「こぁ？」小悪魔は羽をパタパタとさせて喜んだ。

それと対照的にリディアは「えぇ……」と何かいやそうな感じ。

「……どうしたの？　リディア」

「え、だって、悪魔と契約って、魂とか寿命奪われたり、なんかえっちぃ事したりするって……」

「「ぶっ！！！」」

パチュリーと小悪魔は同時に噴出した。

「な、何がおかしいんですか！」

「ゲホッ、ゲホッ、そんなことしないわよ。大丈夫。ただ血を飲ませるだけよ」

「ふふふふ、私の血を一滴リディアさんが飲むだけでいいんです。あと多分、普通に黒き魔法の威力が増大すると思いますよ！　黒ってことは悪魔の呪文なんでしょうから」

「……うん、わかりました……」

リディアはしぶしぶ頷いた。

「さてと、じゃあ契約の準備するからまずこぁは手首でも切りなさい？」

「こぁーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「あ、ちょっと今のは言いすぎたかしら」

手首を抑えて泣き出した小悪魔を背に、パチュリーはとっとと準備をすることにしたのだった。

？　召喚獣　「シルフ」　を　覚えた　！

「変な味」

「こぁの心の味よ」

「こぁああああああああああああああああああ！！！！！」

Ｌｖ５　先生だって、助手をイジっていい……んだよ？（後書き）

あれ？　今回何の回だっけ？　こぁをイジる回だったっけ？

Ｌｖ６　人里だって、私たちで良いんだよ？　上（前書き）

たぶん俺の小説史上初めての上下話。
ってか昨日まではあんま書きたくない（最終幻想郷は）って言ってたのに進む進むｗｗｗｗ
まさかの上下です。計画はしてませんでした。
と、言うか次話で異変起こそうとか考えてました。
まぁとりあえず、リディアと咲夜のかわいさ満点です。どうぞ！

Ｌｖ６　人里だって、私たちで良いんだよ？　上

そんなこんなで黒魔法の力もパワーアップして、いつの間にかリディアは召喚獣を二つも手に入れている。召喚獣の方はまったく気づいていないのだが、黒魔法がパワーアップしたことにリディアは気を良くしていた。

「～♪」

「なんか機嫌良いねリディア。私は実験台で蛙にさせられたって言うのに」

いつものように紅魔館の周りの掃除。緑髪の幼女は鼻歌を歌って機嫌がよさげだが、銀髪の幼女はやや拗ねている様であった。

「あはは、ごめんね。パチュリー様をやるわけにはいかなかったし、妹様も同じ。こぁちゃんはいなかったし、そしたら咲夜しかいないじゃない」

そう、トードだけはうまく行った、あれは状態、というか形態を変化させるだけなのでそこまで弱体化は関係なかったのだ。

「あ、そうそう、他にも今は覚えてないけどポーキーって言う豚になる呪文があって、そのときも協力しｔ」

「やるか！！　ゲコしか言えなくなって今度はブーとしか言えなくなるなんてやだよ！」

「あはははは！！」

そんな元気な声を聞きながら、外で美鈴は「こういうのって良いですねー」とニコニコしながら二人を眺めていた。

「あー、すまない、君はここの門番かい？」

「？　おぉう！　びっくりした！　あと、はい、ここ紅魔館の門番ですが……何か御用でしょうか？」

急に現実に引き戻される思いで美鈴は来客者を見た。自分と同じくらいの背丈の少女だった。

「あぁ、すまない。驚かせてしまったようで。大体半月ほど前だったかな？　この館が急に現れた、ということで様子を見に来てくれ、といわれたんだ。ちょっと主に会わせて貰っても良いかな？」

「あ、お嬢様は今ちょっとご就寝なさって」

「「めーりーん！！　また寝てたのー！？」」

「ち、違いますよ！！　お客様が来てびっくりしただけです！」

「……クスッ。小さい女の子たちだな」

彼女はククク、と笑って悪戯気にこう言った。

「私が来たとき、この門番さんは寝てたぞー？」

「な！？」

「やっぱり！　今日もおしおきだ！」

「咲夜、それだけが楽しみになってない？」

タタタタタ、と二人が駆け寄ってきて、最初に見たのは美鈴のほっぺた。しかしながら、

「……跡がない」

「口を閉じて寝るようになったみたいだね」

「だから寝てませんってー！」

その様子を見ていた彼女はククク、から大笑いへと変わっていった。

「あっはははははは！！！　いやー、面白いところだね。おっと、自己紹介が遅れたな。私は上白沢慧音。人里で守護をしている。よろしく」

「あ、私は紅美鈴で……痛！　刺さないでください！」

「だってお嬢様が寝てたら刺せって」

「私は燃やせって」

握手をしているところにナイフを咲夜。リディアもちゃっかりファイアを用意していた。

「あっはははははは！！　いや、もうやめてくれ！　腹が壊れそうだ！　あはははははは！！」

「笑わないでくださいいいいい！！」

「「あはははは！！」」

結局半分怒りながら泣きそうになっている美鈴を残して、そこは爆笑で包まれたのだった。

「とりあえず主が就寝中では仕方がない。また今度伺うことにしよう」

「すみません。今度いらっしゃるときを伺っても？」

「それでは……また1週間後で頼む。いや、なんか氷精が『此処のうちは悪魔の屋敷だ、幻想郷を襲うとか言ってたぞ！！』とか言っていたものでな、ちょっと心配してきてしまったんだが、それは無いようだな」

今回は咲夜はきっちりリディアの口を塞いだ。

「あぁ、あのチルノとかいう子ですか？　こっちに越してきてから毎日『げんそーきょーのへーわはあたいが守る！』とか言って襲い掛かってこられましてね」

美鈴が困ったように言うと慧音は苦笑して言った。

「そうなのか。それは困ったものだな、今度あったらおしおきだ」

「はは、でもここ最近は出てこないんですよ、何ででしょうね？」

「お嬢様がいい加減にキレてぶっ飛ばしたからですね」

その会話に咲夜が割って入る。

「おや、そうなのか。えーと……咲夜ちゃん、でいいのかな？」

「はい。十六夜咲夜です。こっちがリディア・クアートムーン。よろしくお願いします」

「ふーむ、だいぶしっかりしているな。皆にも見習ってほしいものだ」

人里の子供は悪い意味で元気でね、と慧音は頭をかいた。

さて、キラキラした目で慧音を見つめているリディアと咲夜。

「……行きたいんですか？　人里」

美鈴が聞くと何かに合わされたかのように

「「そ、そんなことあるわけ無いじゃないですかあっはっは」」

と、誰が聞いても棒読みと分かる言葉で返した。慧音は苦笑して、

「あぁ、いいぞ。私から離れなければ大丈夫だろう。美鈴さん、大丈夫かな？」

「構いませんよ。二人とも仕事が終わっていれば」

美鈴はにっこりと頷いた。

「「箒片付けてきます！！」」

我先に、と駆け出して行った二人を見て、彼女らは微笑を浮かべた。

「いい子達じゃないか。いい家だな」

「ですね、私から取ってはここ以上に素敵なところはありませんよ」

ただ――――、と美鈴は息を吸った。

「ナイフで刺されるのは勘弁してほしいですけどね」

「はははははは！！」

美鈴の腰にはナイフが一本、短い尻尾のように刺さっていた。

「「わぁ――――――！！」

「どうだ？　すごいだろ？」

こんなに活気にあふれているところはあまり見たことが無かった。

「ここは商店街だ。魚とか、肉とか。いろいろ売っているな。食料はどうしているんだい？」

「あ、今のところは食いつぶしてる状況です」

「私がいるし、たぶんここまで平気だよね」

リディアは無い胸を張った。そんなリディアに慧音はおぉ！　と驚いた顔を見せる。

「さっき炎を出していたやつか！　能力は持ってるか？　何とか程

度の能力ってやつ。ちょっと気になるからな」

「はい！　黒き魔法と……なんだっけ？」

「自分の能力ぐらい覚えておきなよ。『黒き魔法並びに召喚獣を扱う程度の能力』だったはず」

「てへへ」

慧音は思った。――――――――こいつら、いくらで買える？　可愛すぎるだろう。

「おう嬢ちゃん！　ここらではみねぇ顔だな！」

突然八百屋のおっちゃんに話しかけられた咲夜。物怖じせずに返答する。

「あ、最近引っ越してきたんです！」

「ほほう、新参さんかい！　いいね、可愛いから大根一本くれてやらぁ！」

「おいおい辰、こんな小さな子に持たせるつもりかい？」

景気がいいのか何なのか、辰と呼ばれた八百屋のおっちゃんはがはは、と大きく笑った。

「なぁに、この可愛い嬢ちゃん達なら他の奴等からもいろいろ貰えるだろ！　そいつを家の息子に持たせるさ！」

「ふふ、啓もかわいそうにな」

「じゃあ慧音さんが持ってってくれるかい！」

「な！？　ふふ、これは失言してしまったようだ、――――もっとやれ」

「慧音守護者のお言葉だもんな、実行させてもらうぜ！」

このやり取りをぽかん、と見ていた二人の幼女。……すごい！！

何かわからないけどすごい！

そして適当に挨拶を返していくうちに辰の言ったとおり。みかん箱3箱分もの量になってしまった。

そして持って行け、と命令された少年、啓はくそおおおお！！　と叫びながら半ば焼けくそになってみかん箱を持っていった。

「妖精に気をつけるんだぞー？」

「謎々だしゃいいんだろ？　簡単だぜ！」

その道はチルノが自由に遊びまわっているので妖怪はなかなか出てこないのだ。

妖精最強級、その力は妖怪からとっても近寄りたくは無い脅威、といったところか。

戦利品

大根３本
胡瓜６０本
蜜柑３０個
海老１０尾
団子　みたらし、漉し餡各３０本ずつ
米４０ｋｇ
味噌１０ｋｇ
砂糖３ｋｇ
塩５ｋｇ
豚肉２ｋｇ
鶏肉２ｋｇ
牛肉１ｋｇ
無料券各店舗１５枚ずつ

会計　￥０

「いやー良かったなぁ」

「良かったって言うか……何なんですか？　あれ」

「まぁ……貰える物は貰っといたほうがいいって諺もあるし」

「うん、それは諺でもなんでもないぞ」

慧音たちが商店街を抜けたころには幼女二人はくたくただった。
そして、そこに立ちふさがる少年が一人。

「おや、秋。どうしたんだ？」

「け……けーねはだまされてるよ！　さっきから見てたぞ！　あんなにいろいろと貰えるなんて妖怪の力を借りてるな！！」

いきなり何を言い出すんだこのバカは……。慧音はそう頭を押さえた。

しかし幼女は顔を見合わせ、

「「そうだよ？」」

とのたもうた。

「ほら！　だまされて」

「少しお前は黙りなさい。まず……考えてから」

ノッカー、大きく振りかぶって……

ＣＡＶＥＤ！！！

「……行動しろ」

「……何今の効果音」

「けーぶど？」

そこには頭突きされて倒れている少年の姿があった。なぜか二人はそれを見て死んでるみたいだけど別に構わないよね、と判断した。

美鈴精神である。

「しかし妖怪とはどういう事だ？」

「あ、召喚獣のことです。今はそ、その、ミスティアとかいうのしか召喚できないんですけど」

「あー、夜雀か。なるほどなぁ」

慧音が納得すると、

「おや慧音氏。お子様ですの？」

「ん？　おぉ阿弥。んにゃ、知り合いの子だ。ところで、体のほうはいいのか？」

「はい、別段症状はありませんし」

そう言って彼女、阿弥はにこっと笑った。

稗田　阿弥、御阿礼の子の８代目である。
しかし彼女、今年で齢３０を迎える。そろそろ子を為し、閻魔に許しを請わぬといけない時期に来ている。
おかげで毎日【自主規制】をせねばならず、このようなやや病弱な体になってしまっているのだ。

「どうやら今回は異常事態といっては何ですけれども。閻魔様が代を代わられる、ということで私の子がそのまま御阿礼の子となりそうですの」

「ほほう、そうなるとアキュウ、ということになるのかな？　それとも、アク、か？」

そういえば三十年ほど前もお前の名を考えてたな。アヤかアハチかアッパか。そう慧音が思い出にふけると、

「だって慧音氏、あっぱで通した方が良いんじゃないかとお母様に何度も進言してらしたとか。流石にあっぱは無いと思いますの」

「……慧音さんネーミングセンスないですね」

「私だってあっぱは無いよ」

「う……うるさい！」

今度は慧音が恥ずかしがって、阿弥とリディア、咲夜が大笑いする側に入った。

「ちなみに子供を作ったとしたら子供の名前、どうするんですの？」

「んー、……真面目に言うと……井戸水（イドミズ）なんてどうだろう？」

「「「ブッ！！！！！」」」

「な、ど、どこがおかしいんだ！！」

Ｌｖ６　人里だって、私たちで良いんだよ？　上（後書き）

慧音のキャラは俺的に「真面目な天然」だと思ってます。異論は認める。
そして原作より十年弱前なので稗田家先代が。……これは、説教魔人が出てきそうな雰囲気です、よ、ね？

そして個人的な宣伝。ニコ静のけーね描き、ｒｅｂｂｅｃａさんのけーねは憤死する。

Ｌｖ７　人里だって、私たちで良いんだよ？　下（前書き）

プロットないとここまでひどいという感じ。

はっきり言って今回駄文ですわー。

えと、その、……ごめんなさい。

Ｌｖ７　人里だって、私たちで良いんだよ？　下

「おっちゃん！　団子一つ頂戴な！」

「今度うちの前で説教されたら嫌だぞ！？　大丈夫だろうな！？」

「だーいじょうぶ大丈夫。今度の閻魔様はちょっとちっさいって言うからそこまでうるさかないでしょ」

「まずだな、仕事をサボってくるんじゃない！　と、いつもの癖で三色団子作っちまった……」

「お、それは私が食べちゃわないと悪くなるねえ。じゃあいただくよ！」

「はいはい……お、慧音さん！」

「やぁ与作。お？　……また小町はサボってきているのか？」

小町と呼ばれた赤髪の少女はゲ、という顔で慧音を見た。

「……わくわく」

「次こそ何が見られるかが楽しみだね」

何か良くない雰囲気が流れる中、何かを感じたのかリディアと咲夜はわくわくと言いながら慧音と小町を見ていた。

Ｃ！

Ａ！
Ｖ！
Ｅ！
Ｄ！

ｃａｖｅｄ！！！
ｃａｖｅｄ！！！　３ｃｏｍｂｏ！
ｃａｖｅｄ！！！　４ｃｏｍｂｏ！
ｃａｖｅｄ！！！　５ｃｏｍｂｏ！
ＣＡＶＥＤ！！！　６ＣＯＭＢＯ！！！

「……」
「……」

彼女らが持った思いは一緒だった。

（（見なけりゃよかった……））

阿弥と別れてから慧音はこいつらに団子でも奢ってやろう、と茶屋に足を延ばしていた。

「ダンゴって何？」

「リディアお前団子を食べたこと無いのか？！」

「え……はい」

「それはもったいない。あそこの団子はおいしいからな。咲夜は何が良い？」

「みたらしが良いです！」

じゃあリディアもそれでいいか。そう言って慧音は茶屋に来た……のだが。

ご覧の有様である。

「慧音さん怖い♪」

「リディア怖いー♪」

「慧音さん凶器♪」

「リディア逃げるー♪」

「ちょっと待てなんだその歌は！！」

リディアと咲夜は歌らしきものを作り上げながら小声で歌っていた。

「うん……いや、その子たちに同情するね。小さい頃からあれを見せられたらそりゃトラウマになるって。目にもとまらないスピード

で首から上を叩きつけてるんだぜ？」

「……与作ぅ……」

「あー悪かった、悪かったから泣くなっての！！」

与作は罪の意識から逃れるために首を幼女に向けた。

「嬢ちゃんたち何がいい？　何でもタダでいいぞ？」

「え！　本当にタダでいいんですか！？」

咲夜は目にもとまらぬスピードで詰め寄った。

「お？　お！？　あぁ、大丈夫だが……そんなに団子が好きか」

「はい！」

「じゃあ何がいいんだい？」

「みたらしお願いします！！」

ポツン、と取り残されたリディア。与作は彼女にも聞くが、

「はぁ！？　団子を食ったことがない！？　そいつぁいけねぇ。うちの団子全種類こっちの嬢ちゃんと食べて行きな！！」

「やったあ！　与作さん男前です！」

「そんなことは１００年前からわかってるよ」

咲夜は与作に飛びつくが、リディアはどうしてそんなに嬉しいのか分からなかった。

「ねぇ、その咲夜が食べてる三色のって骨と血とモンスターの血を使ってるの？」

「「「ぶっ！！！」」」

「あまーい！　おいしいね！！」

「だろう？　どうだ、これが団子だぜ嬢ちゃん。たっぷり食っていきな！！」

「う、うーん、ここは……げ！！　新しい闇魔様！？」

「誰の事を言っているんだお前は？　この子はリディアだが」

「慧音さん怖い♪」

「咲夜！！」

そして小町は。

「小町！　あなた私の就任挨拶も聞かずにあっちをふらふらこっちをふらふら！！！！」

「小町……テメェ今度の閻魔は違うとか言ってたよなぁ……。何だこの様は。あぁん！？」

「店主、今は私が話しているのです。ちょっと黙ってい」

「あぁ！？　俺はなぁ、何度も何度も何十回も何百回も何千回も何万回も何億回も！！！　このバカ死神とあんたの先代の前でずっと客が逃げちまう生活を送ってんだぞ！？　何が黙れだぁ！？」

「ひいっ！？」

「いや与作押さえろ押さえろ」

結果、小町の上にやってきた新しい閻魔。この方も例にもれず説教の塊だった。

しかし、その説教欲より彼、与作の怒りは上回っていたのである。

「へぇ、小町さんって死神だったんだ」

「今度こそ契約したらぶつぶつ」

そして、彼女とリディアは

「しかし、小町、この方は？　まるで私のようなのですが」

「あ、リディアと言います。よろしくお願いします！」

「そうですか。わたしは四季映姫。この後ヤマザナドゥという役職名も頂きますが、映姫で結構です」

「よろしくお願いします！　映姫様！」

そう、瓜二つであった。眼の色以外は。

映姫は青眼、リディアは緑眼であった。だがそれ以外は……。

「こんな一致ってあるんだなぁ……。そして小町どこへ行く？」

「見逃してくださいよおおおお！！」

結局店主と話し合った映姫は、『言い訳は地獄で聞く』に決定した。

「あぁそうでしたリディア」

映姫がリディアに顔を近付ける。

「ッ！？」

バッと反射的に顔を離してしまうリディア。映姫はその顎を支え、近寄らせた。

「〜〜〜〜〜ッッッ！！？？」

「……本当にそっくりですね……あとそうそう、ちょっと話したいことがあるのでまた今度会いませんか？　……リディア？」

ぼぼぼぼぼぼぼぼとばかりに顔から火を吐くリディア。その口からは「キスは早いってやっぱりまだ私7歳だしって言うか女の子同士

でやっちゃだめなんだよ子供できたらどうするのやめて駄目だって
ちょっと待って私同士だとか勘違いしてないいやいやいやいやいや」

「……大丈夫ですか？」

「責任を持って引き取ろう」

「いや慧音さんマジで怖いです鼻血って」

「咲夜、お前もどうだ？」

「お断りします」

「……あーっと、これ、誰が〆るんだ？」

結局外が暗くなるまでこの騒ぎは続いたという。

Ｌｖ７　人里だって、私たちで良いんだよ？　下（後書き）

レミリア「なに……この野菜とか……」

というわけでだいぶスピードダウンしちゃった感があるＬｖ７でした。

さて、次回はいよいよ……。

Ｌｖ８　こんな私だって、力になれるんだよ？　１（前書き）

さて、吸血鬼異変のプロローグはいりました。
彼女たちの運命は……。

Lv8　こんな私だって、力になれるんだよ？　1

リディアと咲夜が帰ってきて一番最初に見たのは野菜に埋もれたレミリアだった。

「「「・・・。」」」

最初に口を開いたのは咲夜だった。しかし、

「えと、お嬢様、何があったんですか？」

「う、うるさいわね。サッサと除けてよ」

と、恥ずかしげな声が聞こえるばかり。

そこはキッチン。基本的に主であるレミリアが入るはずのない場所なのだが。

「もしかして、この食材でも使って料理をしてみよう、なんて思われた……とか？」

「バレた！！　じゃなくて！　ち、違う、ただ自分の夜食をあー違うもごもご」

と尻すぼみになっていくレミリアの声。とりあえずこのままでは埒が明かないので咲夜はパチュリーを、リディアは美鈴を呼びにいった。

「うー！　だから！　あんたたちのために夕食をつく……どこ、行

ったのよ……」

言っているうちに周りに誰もいないことに気がついたレミリア。

4人が戻ってきたとき彼女はうーうー言いながらしくしく泣いていたそうな。

「さて、それでは皆に発表するわ。明日よ」

引っ張り出されたレミリアが向かったのは自室。短絡的にそこが一番広いからであった。

それはさておき、彼女が言い出したその明日とは。

「以前私が説明したわ、リディアには」

「OK。リディア、前にも言ったように、すべての力を私のために使いなさい」

「わ……わかりましたっ」

とても先ほどうーうー言っていたものと同一人物だとは思えない。

その威厳はたかが7歳の小娘を畏怖させるには充分だった。

「と、言ってもお嬢様、リディアはともかくとしても私には能力がないんですが……」

「そう、だからあなたは前線には回らないわ」

それに対し弱冠7歳の小娘は臆することなく発言した。

「それでは、私はここに待機するのですか？」

「いえ、あなたとリディアとパチェで、裏交渉に回ってもらうわ」

作戦としてはこうである。

まずレミリア、小悪魔、美鈴は事実上人間の天辺である博麗の首を取りに行く。とてもシンプルな作戦である。

「まぁ状況によっては八雲紫が出てくる可能性もあるからね。速攻で決める。いいな？」

「「はい」」

身鈴と小悪魔が神妙な面持ちで頷く。

そして裏交渉、大きな勢力を持つもうひとつの組織、———妖怪の山の占領である。

「無血開城、もしくは全滅、どっちがいい？　とまぁそういうわけですね」

「咲夜、正解。よくそんな言葉を知ってるじゃない」

エへへ、と7歳の幼女は照れた。

「とりあえず今日明日はよく休みなさい。後咲夜はパチェに就いて身の守り方ぐらいは学んでおきなさい。リディアは同じく魔法演習。パチェ、すまないわね」

「別にかまわないわよ」

「うん、じゃあ、最後に目的を再確認するわね」

スーッとレミリアが息を吸う。ただ、それだけで一気に場の空気が凍ったかのように、リディアは感じた。

「我々の目的は、幻想郷制圧。起こした当時は吸血鬼異変と呼ばれるでしょうが、いずれそんな不名誉な『異変』じゃないことを知らしめなさい」

「うん、だいぶ筋は良くなったわね」

「ありがとうございます……でも、いくらなんでも早くないですか？　もうファイラなんて……」

ファイラ、燃焼呪文。ファイアは炎を出現させるものだがこの呪文は炎柱を発生させるものである。

しかし、それにパチュリーは首を振った。

「最終的にと言うか、明日までにそれを自由にできるようになってほしいの」

「自由……ですか？」

そう、とパチュリーは頷いた。

「あなたは前に決まった量の魔力を消費して決まった魔法を放つって言ってたわよね？」

そうじゃなくて、と彼女は続ける。

「込める魔力の量を自由に変動させて、自由な威力と形を作ってほしいの」

「ってことはファイアでファイラの威力だったりその逆だったり？」

「そう、そんなこともできるわね。この間言っていた事によると基本形、ラ、ガ、という風に威力が増大していく、と聞いたけど。基本形だけで自由にやってほしいのよ」

固定概念に縛られすぎなのだと、彼女は言う。

ＦＵＬＬ　ＭＯＯＮ　ｂｌａｃｋ　ｍａｇｉｃ×２　ａｔｔａｃｋ×１／２

Ｒｙｄｉａ's　ｂｌａｃｋ　ｍａｇｉｃ　ｐｏｗｅｒ　＝　×

２　×１／２　＋５０　＝

翌日、満月。
吸血鬼が最も活動が良くなる時期であり、同じく悪魔の力を借りて呪文を唱えるリディアにとっても最高のコンディションである。

（ただ……）

パチュリーは思った。

（クアートムーンという名前で黒き魔法の威力が一回減ってるから増大されても……）

以前実戦形式でパチュリーがファイアを食らってもくすぐったいとしか考えられなかったのだ。

２倍にされたとしても２分の１だ。小悪魔の力で少し強まっているとしても１倍とちょっとである。

（……）

レミリア達は既に出ている。もうそろそろ自分たちも出なければならない。

「パチュリー様、もう行きましょう」

ほら、メイドからも催促を受ける。パチュリーは頷いて浮き上がった。

「えぇ、行きましょう、咲夜。リディアは？」

「外で待っています。今現在少しだけ門番状態なわけです」

「そう……じゃあ、行きましょう」

パチュリーはしばらく考えてから、そこを出た。

そこには、子小悪魔が取り残されてたりした。

「ここぁー！」

Ｌｖ８　こんな私だって、力になれるんだよ？　１（後書き）

シリアスだって最後はきっと落とします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5278v/

最終幻想郷　幼女と少女　~forth hearts' had Rydia plus you~

2011年10月12日12時57分発行